とある怪異の蛇の王

黒棘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある怪異の蛇の王

【Ｎコード】
Ｎ９５８２Ｓ

【作者名】
黒棘

【あらすじ】
独りの男は世界に絶望していた。
両親には小さい時に虐待されて、捨てられた。
孤児院でも虐められ独りだった。
社会に出てもそれは変わらなかった。

親友と呼べる者も居ない。頼る人が居ない。

ウンザリだった

男は絶望を抱いたまま自らの手で命を断った。

しかし、神はそれを良しとせず男を異世界へ送った。

ある能力と共に

男は新たな世界で何を思い何を成すのか…

今、科学と魔術と怪異が交差する時、物語が始まる。

さようなら、もっとも嫌いだった世界（前書き）

やってしまった、後悔はしてません！

ちょっとした息抜きです！生暖かい目で見守って下さい！

さようなら、もっとも嫌いだった世界

俺の周りを囲むのは、木、木、木、所謂森に居る。

物語の主人公なら、「知らない場所だ」なんて言うんだろうが、生憎と俺は違う。

なんでこんな場所に居るのか？その答えは単純だ。

死に場所を探していたんだ。所謂自殺者という奴だ。

小さい時に虐待されて、捨てられた。

孤児院でも虐められ独りだった。

社会に出てもそれは変わらなかった。

今まで絶望しかない人生だった。

生きていても辛いだけの日常生活がやっと終わる。

そう思うだけで、俺の心情は穏やかになった。死の恐怖もない。

あるのは楽になれる、その事だけだった。

鞄に忍ばせていたナイフを首にあてがうと、俺は真横に引き裂いた。

首から血がドバドバと溢れてくる。体温が徐々に下がっていくのが判る。痛みは感じない。

そういえば、自殺は地獄行きだったなぁと、場違いながら思う。
しかし、生きていても地獄が続くのだったら、今と大して変わんないか…まぁ、どっちでも良い。

自嘲しながら目を瞑る。

意識が遠のいてきた、そろそろこの世とお別れみたいだ。

さようなら、もっとも嫌いだった世界。

こうして独りの男は息をひきとった。

しかし彼はまだ知らない。これが始まりだとゆう事は…

さようなら、もっとも嫌いだった世界（後書き）

感想、ご指摘お待ちしております！

受け継がれる力（前書き）

結構、私にしたら長い文章でした…（^__^；）

感想、ご指摘お待ちしております！

受け継がれる力

「……さい、…きて下さい。」

誰だ…もう死んだんだからほっといてくれ。

「…きて下さい…起きて下さい。」

しょうがなく目蓋を開けると目の前には真っ白な空間が広がっていた。

「案外、質素な所なんだな…地獄って」

ボソッと呟くと横から声が聞こえてきた。

「ここは地獄ではありませんよ?」

俺は上体を起こし、声の聞こえてきた方へ身体を向けると、そこには美しい女性が立っていた。黒髪は腰の位置まであり、瞳は澄んだ琥珀色をしていた。肌は絹のように滑らかで、街を歩けば十人中十人が振り返るだろう。

「あなたは誰ですか?」

「私ですか?私は天照大神と申します。貴方達の言うところ神をやっております。」

神…ねぇ。

生憎俺は神とゆうものを信じた事は無い。なぜなら、小さい頃、

何回も苦しい時神に祈った。しかし、祈った所で状況が変わった事が無い。それから神は居ないと思いこれまで生きてきた。

よって、この人が神…と信じる気にはなれない。

そんなの嘘だろ？と言う気でいたら…

「貴方が、小さい頃何回も私に祈っていたのは知っています。…その…両親に虐待されていた時も…孤児院で虐められ独りだった時も…」

驚いた。まるで人の心を読んだかのように目の前の女性が言ってきたのだから、それに俺の幼少期の出来事を知っていた事に…だ。

何故それを？と聞こうと思ったら…

「私は一応これでも神ですよ？読心術位できますよ？どうですか、これでもまだ信じられませんか？」

と、言ってきた。

ああ、これは本物だな…認めよう、この人が神だとゆう事は。しかし…

「何故、何故助けてくれなかった！あんた方神は見て見ない振りをするのが仕事なのかよ！」

天照大神にあたっても仕方ないのは判っている。判っているが気持ちが押さえきれない。

「ごめんなさい…でも、助けてあげたかった…苦しむ貴方を見て私は助けたかった。でも…一人の人間に肩入れするのは神の世界では禁じられているの…ごめんなさい…」

そう言うと彼女…天照大神は深く頭を下げた。

当然、俺は困惑した。だってそうだろ？神が人間如きに頭を下げるなんて、しかも最高神がだ。怒りが削がれてしまった俺は…

「…なあ、頭を上げてくれ。あんｔ…貴方に非は無い…こちらこそ強くあたって申し訳ない…すいませんでした。」

そう言って頭を深く下げた。すると天照大神様は慌てて

「いえ！あの！頭を上げてください！貴方はなにも悪くはないです！むしろ人として怒るのは当たり前だと思います！だから頭を上げてください！」

「しかし…神である貴方に暴言を吐いてしまったのは事実、申し訳御座いませんでした。」

「いえ！だから！その！頭を上げてください！」

その慌てっぷりを見て俺は

「…っぷ！クックック、はははははは！」

「…え？笑うなんて酷いじゃないですか！」

「いや…っぷ！そんなに慌てるなんて思っていなかったものですから、ククッ！」

「む～！酷いですよ！」

「いや…本当にすいません。あぁ、こんなに笑ったのは初めてだな…。」

「……そうですか、それは…良かったですね！」

天照大神様が複雑そうな顔をした後、花が綻ぶような笑顔を向ける。多分、こんなに笑ったのは初めての部分が引っかかったのだろう。実際にあんなに笑ったのは本当に初めてだった。今まで絶望しかない人生だったからなぁ。

でも変な空気になったな…気まずい。よし！話の方向を変えてみるか。

「今更ですが、ここはあの世ですかね？それと何故、天照大神様が私なんかのためにここに居るんです？」

「そう自分を卑下しないでください…後、天照と呼んでください。」

「いえ…流石にそれｈ「駄目…でしょうか？」うっ！」

流石にそれはマズイでしょう、と言おうとすると手を胸の前で組み上目づかいで、お願いされてしまった。

あんな顔をされてしまったら…断れないでしょうが！でも神様だしな～、でもお願いされてしまったし…

等々、考えを巡らしていると。

「あの～？やっぱり駄目でしょうか？」

顔を覗き込むように天照大神様が見てくる。…駄目押しだ。しょうがない！

「はぁ～、わかりました天照様、これ以上は譲れませんからね！」

「む～、私としては様も敬語も要らないんですけども…」

「駄目です！これ以上は譲れません！そもそも神様が俺達人間如きにタメで話しをして良いなんて、軽々しく言うものではありません！大体、会って数分位の人間に気をゆｒ「ああ！え～と、ここがどこかですよね！」…む」

話しを無理矢理逸らしたな。まぁ、ここがどこかは気になっていたが…

「ここはですね、あの世ではありません。かと言って現世でもありません。そうですね例えるなら…現世とあの世の狭間…とでも言いましょうか。」

「現世とあの世の狭間…ですか？しかし何故俺はここに居るんです？」

「それはですね。私が貴方の魂をここに呼びある事を頼みたかったからです。」

そうゆうと天照様は真剣な表情になる。

「まず一つ。異世界に大量な妖怪、怨霊、悪霊が流れ込んでしまいました。それを処理して欲しいんです。」

「へ？悪霊？妖怪？異世界？」

妖怪？悪霊？そんなもん本当に居るのか？ってかその前に異世界って…

「次に二つ目ですが「ちょ、ちょっと待って下さい！」はい？何ですか？」

「悪霊とか妖怪とか異世界ってどうゆう事ですか！それに俺には何の力も無いですよ！」

「ああ！まずは妖怪、悪霊について教えておかなきゃですね。妖怪は昔から居る生命体ですね、良い妖怪も居るんですけど悪い妖怪も居るんです。悪霊とはそのまんまですね！悪い幽霊です。何故異世界に居るか何ですけど…神々の力が弱まってしまって封印していた妖怪や怨霊が異次元の穴を見つけて突破してしまったのです。何故神々の力が弱まってしまったかとゆうと神々の力の源は信仰心から来ています。現在では神を信仰する人があまり居ないのが現状です…悲しい事ですけどね…後貴方にはそれらに対抗できる力を授けますのでご安心を…」

「対抗できる力？その前に何故俺なんですか？」

「それが二つ目です、貴方には今度こそ幸せに生きて欲しいから…です。前の世界では辛い思いばかりされていたでしょう？新しい世界では、楽しく生きて貰いたいのです。」

「でも一人の人間に肩入れするのは禁じられているとかいってませんでしたっけ？」

「ええ…ですが貴方が妖怪退治をしてくれるなら特例として認めて貰う事ができました。このお願いを聞いてはくれないでしょうか？」

幸せに生きる…か、考えたことも無かったな。それに異世界なら俺でも幸せに生きる事ができるだろうか？

いくら考えても答えは出ない。…なら

「…せっかく貰った二度目のチャンスです…俺なんかでよけれb

「本当ですか！」え、ええ…」

返事を聞いた天照様は身を乗り出して聞き返した。ってか近い！

「本当に本当ですか！」

「ええ、俺なんかでよければ。ってか近いです！天照様！」

「あっ！すいません／／／」

どうやら天照様は天然なようだ…

「そ、それでですね！妖怪に対抗できる力を授けたいと思います！」

「待って下さい。妖怪に対抗できる力ってどんな力ですか？」

「それはですね、ヤマタノオロチの力です。…とゆうかヤマタノオロチになって貰います！」

「えぇ！？ヤマタノオロチってあのヤマタノオロチですか！？大妖怪じゃないですか！？ってか何故妖怪になるんですか！？」

「妖怪…とはちょっと違いますね。ヤマタノオロチは水神なんです。また水とは陰陽五行の木、火、土、金、水の中で黒を配し、お祓いを示します。よって厄災から護るとされています。」

「でも素戔嗚尊様に…天照様の弟君に討伐されたはず。」

「その事も知っているんですか？…そうですが…もともとオロチは優れた水神でした。しかし一人のある娘に恋をして、狂ってしまいました。」

「それって…クシナダヒメの事ですか？」

「え？そこまでご存知なんですか？そう…私の弟の素戔嗚のお嫁さん…私の義妹に恋をしました…」

「でも文献にはヤマタノオロチはある村にいた八人の娘の内七人を食べ、そして末娘であるクシナダヒメを生贄に出すよう言って、困っていた老夫婦に素戔嗚尊様が救いの手を差し伸べて、そしてヤマタノオロチを討伐した…と、書いてあったような気がするんですが…」

「そうですか…現世ではそのように伝えられているのですか…でも実際は違います。ヤマタノオロチは娘…いえ、人間を食べていません。…先ほども言ったようにオロチは優秀な水神でした…管理し

ている土地に悪い妖怪や怨霊が入ろうものなら問答無用に食べていきました。土地は肥沃な大地が広がり川は清らかに流れていました。

しかしある時に義妹に出会ってしまいました、この出会いがオロチを狂わせてしまい…結果、弟に力を奪われ討伐されてしまったのです。

そしてオロチの力を受け継ぐ者が現れるまで、それを封印していたのです。」

「まさか…その力を受け継ぐ者って…」

「そうです…それが貴方なのです。」

「何故俺なんですか…」

「オロチの魂と貴方の魂はとてもよく似ているから…です。またオロチも貴方に似た境遇に合っています。…小さい頃に親に異端視され捨てられて、また友と呼べる者もいず、生涯一人で過ごしていました…」

俺に似ている…いや…俺が似ているのか…

「…話しがだいぶ逸れてしまいましたね。オロチの力を受け継いでくれますか？」

似たような境遇…か。まぁ、一度死んでるんだし、人間辞めても良いか…

「…はい、受け継がせていただきます。」

「そうですか…良かった。ではこれを飲み込んで下さい。」

そう言って差し出したのは鬼灯色のビー玉位の玉だった。

「これは？」

「これがオロチの力です。飲み込めば受け継ぎは完了します。」

「…わかりました…ングッ！」

俺は迷わず飲み込んだ。すると体が暖かい何かに包まれたように暖かい。暫くすると元に戻ったが。

「これで引き継ぎは完了ですか？」

「はい！無事に引き継げましたよ！後、自分の姿を見てください！姿が多少変わっていると思いますよ！」

そう言って手鏡を渡されて、自分の顔を見てみると。

右半分が鱗のような痣に覆われていて、目は鬼灯のような紅で爬虫類のような目になっていた。

「これで多少ですか？」

「アハ…アハハ、ついでに言うと尻尾も付いてますよ？」

「尻尾！？」

言われて自分の腰あたりを見てみると…尻尾が生えてました、しかも八本も…

「って！こんな姿じゃ妖怪退治どころか、街も歩けないじゃないですか！」

「アハ…ハ、だ、大丈夫ですよ！霊体になれますから！街の人達にも見られません！」

「霊体？どうやってなるんですか？」

「え～と、霊体と呟けばなれるはずですよ！後念じても出来るはずです！」

ふむ、試しにやってみるか。

「霊体」ボンッ

煙に包まれる。

煙が晴れると…

「おお！透けて見える！で…戻る時はどうすれば良いんですか？」

「現解と念じても言っても元に戻れますよ！」

「現解」ボンッ

「おお！元に戻った！」

「ああ、後貴方はこれで神の一員となったので、不老不死と…水

神なのであらゆる液体、水分を操る事が出来ますよ！」

「なんとゆうハイスペック！？」

「では、そろそろ時間も無いので異世界に行って貰います。」

「はい！」

「今ゲートを創りますから待っていて下さい。」

そう言って天照様がなにもない空間を指でなぞるような動作をすると

ブンッ！と音を立てて真っ白な空間にぽっかりと暗く先の見えない穴が現れた。

「神様って何でもありですね…」

「そうでもないですよ？まぁ、これは私にしか出来ない芸当ですけどね。」

「それじゃあ、色々ありがとう御座いました！」

「いえ…私に出来る事なんてたかが知れてますから。こちらこそ私の自己満足に付き合っていただきありがとう御座いました！」

「では、さようなら。」

「いえ…またいずれ会いましょう！」

「！そうですね…またいずれ会いましょう！天照様！」

お互いにそう言って別れ、俺は穴の中に入る。すると…

「あ！言い忘れてましたけど！異世界は、とある魔術の禁書目録・とある科学の超電磁砲、に限りなく近い世界ですから！」

そう言うと穴が閉じた。

……マジで！？

受け継がれる力（後書き）

感想、ご指摘お待ちしております！

リョウメンスクナの怪（前編）（前書き）

前回に比べるとかなり短いですが、楽しんでくれると幸いです！

リョウメンスクナの怪（前編）

おはこんばんちは。

ヤマタノオロチ改めオロチです。名前は無いのかって？

名前はオロチになった時点で捨ててきた、今は、とあるの世界に最も近い世界に逃げ出した妖怪や怨霊を退治するために、天照様によって創られたゲートを歩いている所だ。

…いかんな、誰に説明してるんだ…俺…大丈夫か？

ひたすらに暗い、とゆうか真っ暗な空間を歩いている。いつまで歩けばいいんだ？と、思っている矢先に光が前方から差し込んできた。

「お、やっと出口か？」

少し早足になる。暗い所にいたせいか、光に近づくにつれ眩しくてなる。やがて俺の体は光に包まれた…

―？Ｓａｉｄ―

「はぁ～、すっかり遅くなっちゃったな～。ったく！こんな遅くまで補習授業すんなっての！あ～あ、晩御飯なに食べよっかな～」

ここに、ある中学校に通う女子中学生が居た。どうやら補習授業があったようで、辺りは暗くなったいる。

「しょうがない、冷蔵庫にあるもので食べよ。」

街灯がポツポツとついている中を少女は歩いていく。

暫く歩くと少女は歩みを止め、うっそうと木が生えて真っ暗な公園をふと見た。

「ちょっと暗いけど…近道だし、公園を通って行こう。」

少女は公園へと入っていった、彼女は知らない。公園に足を踏み入れた時、怪しく光る眼差しが彼女に向けられていた事を…

ザッザッザッと、闇の中に少女の歩く音が反響する。

「うぅ～、こんなに暗い公園も不気味だな～。やっぱり遠回りでもいつもの道から帰ればよかった。…そう言えばここの公園だったっけ。行方不明者が続出してるのって。」

そう、最近行方不明者が続出しているのだ。風紀委員（ジャッチメント）、警備員（アンチスキル）が総力を挙げて探しているが、手掛かりになりそうな物は何一つ見つかっていない。

「まさか…ね、くだらない事考えてないで、さっさと帰りますか！」

そうは言ったものの、少女の歩みは少し早足になる。

ガサガサ！

少女が早足で歩いていた所、右横から物音がしてきた。

「誰！？」

少女が声を上げ、音源の藪に声をかける。

しかし、辺りはシンと静まりかえっている。

「き、気のせい…かな？」

少女は再び歩き始める。心なしか先程よりも早足になっていた。

ガサガサ！ガサガサ！

再び藪の方から木の葉が擦れる音が聞こえてくる。

しかし、少女は今度は歩みを止めず、そして一気に走り出し藪を抜け出した。

「はぁはぁ！こ、ここまでくればもう追って来ないよね！はぁ～、こ、怖かった～！」

少女が安堵の声を漏らす。が…

ジャリ…ジャリ

前方の砂場から音がする。

少女は前方に目を凝らすと、２m位の大男がこちらに歩いてくるのが見えた。

「良かった～、人が居たよ～。」

ホッと一息吐くと少女は再び歩き始める。

大男との距離がどんどん近付いて行くと、少女はある事に気付いた、大男の手には刀が握られている。

「あれって刀…だよね！まさか！行方不明事件の犯人！」

少女は踵をかえそうとすると、大男の姿が街灯に照らされ露わになる。なんと腕が体の前後に2本ずつ。足も前後に2本、顔も前と後ろについているではないか。少女は逃げる事も忘れ只、呆然と大男を見る。大男は少女を見やると、ニヤリと笑う。口の端からは涎が垂れ、歯は人間ではまず有り得ないギザギザした歯をしているのだ。

少女は腰を抜かしペタンと地面に座り込む。無理もない、人ならざる者を初めて見たのだから…

「あ、ああ！」

もはや恐怖で言葉も出ない。

異形の大男がジャリ、ジャリと音を立てて歩み寄ってくる。

そこで少女は気を取り戻すと、なんとか逃げようとする。

逃げようとはするものの、体がゆう事を聞かないのだ。

ジャリ…

歩み寄る音がやむ。少女は恐る恐る後ろを振り向くと、異形の大

男がすぐ後ろに立って居た。

異形の大男が口を開く。

「オマエ、ウマソウダ、クワセロ」

片言に喋る様は人間で無い事を再確認させられる。

異形の大男が刀を振り下ろそうと刀を振り上げる。

（殺される！）

少女がそう思い目を瞑る。

ヒュン！

ボトッ！

「ギヤァァァァァァァァァァ！」

「え！」

少女は異形の大男の悲鳴を聞き、瞑っていた目を開けると、異形の大男の腕が目の前に落ちていて、異形の大男は腕が無くなり、苦痛の悲鳴を上げ、もがき苦しんでいるではないか、一体何が起こったのかと思っていると…

ジャリ…ジャリと後ろから音がする。

少女は慌てて振り返るとそこには、目は鬼灯のような紅で、顔の

右半分が鱗のような痣に覆われ、後ろには爬虫類のような8本の尻尾がある男がもがき苦しんでいる異形の大男を見下ろすように立っていた。

「嬢ちゃん、大丈夫だったか？」

声をかけられて、あたしは意識を手放した。

リョウメンスクナの怪（前編）（後書き）

感想、ご指摘お待ちしております！

リョウメンスクナの怪（後編）（前書き）

異形の大男の戦いはこれで終わりです。

感想、ご指摘お待ちしてます！これからも見捨てないでください！

リョウメンスクナの怪（後編）

「嬢ちゃん、大丈夫だったか？」

そう言うと少女は気を失ってしまった。

「っと、大丈夫か？っても気を失ってるから聞こえないか…」

気を失って倒れる少女を抱き止める。そして、空いているベンチに寝かす。

「さて…お前は異世界から来た妖怪か？」

「キサマ！オレノショクジヲ、ヨクモジャマシテクレタナ！コロス！キサマカラコロシテヤル！」

「駄目だな…まるで会話が成り立ってないな…」

「コロス！コロスコロスコロスコロスコロス！クッテヤルゥゥゥゥゥ！」

異形の大男が残っている手に刀を持ち替えて、オロチに突っ込んでくる。目は血走り、口の端からダラダラと涎を垂らし激昂している。

並みの相手なら逃げているだろう。

ブンッ！と刀が振り下ろされる。その速度は決して遅くはない。

しかし…

「遅ぇ！」

オロチは易々と避けてみせる、ガツッ！っと地面に刀がめり込む。その間にオロチは異形の大男に攻撃を仕掛ける。

「行け！」

そう言うと、どこからともなく水の刃が現れオロチの周囲に展開されると、異形の大男めがけ凄まじいスピードで迫る。

斬！

「ギヤァァァァァァァァァァ！」

残っている手が切り落とされ、醜い叫び声が公園に響く。

「これで残っている手は後ろ2本だけだな…」

「キサマ！ヨクモ！ヨクモォォォォォォ！コロス！コロシテヤルゥゥゥゥゥゥ！」　異形の大男は狂ったテープのように何回も同じ言葉を吐き、今度は後ろを向くとまだ健在な腕を振り上げ突っ込んでくる。

「だから…遅いって言ってるだろ！」

異形の大男の攻撃を捌き続けるオロチ。

「チョコマカト！アタレ！アタレェェェェェェェェ！」

「ダテに喧嘩慣れはしてないんでね…それに、当たれと言って当

たる馬鹿は居ないと思うがね…」

オロチは小馬鹿にしたように言い放つ。

「オノレェェェェェェ！」

異形の大男は更に激昂し、拳を振るうスピードが上がる。

「ありゃりゃ、少し馬鹿にしすぎたかな？」

「ドウシタ！カワスダケデハ、オレハコロセナイゾ！」

そりゃもっともだ。まあ、かなり怒ってるおかげで動きが単調になってるがな…じゃあ

「反撃開始と行きますか！」

「ホザケェェェェェ！」

異形の大男は右ストレートを放たれる。しかしオロチはそのスピードの乗った右ストレートを捌き、スピードを生かしたまま背負い投げに持ち込んだ。

ドゴッ！っと地面に異形の大男を沈める。

「カハッ！」

異形の大男はたまらずに血を吐き出した。

「どうした？地面にキスして、そんなに大地が大好きなのか？」

「オ…ノレ！」

異形の大男がググッと体に力を入れて立ち上がろうとするが…

ドゴッ！

「グハッ！」

オロチが空中で一回転し鳩尾にかかと落としを食らわす。モロに入った事により異形の大男はたまらずに血を吐き出し、目は焦点が合っていない。

「さて…そろそろ終わりにするか…集え」

そう言うとオロチの手に水の刀が現れる。

「知ってるか？水でも鉄は切れるんだぞ？」

ジャリ…ジャリ…と一歩また一歩と異形の大男に近付いて行く

「マ、マッテクレ！オ、オレガワルカッタ！ダカラミノガシテクレ！」

ジャリ…

「ソウダ！オレタチガクメバ、コノセカイハオレタチノモノニナル！」

ジャリ…

「コノセカイガオレタチノモノニナレバ、ニンゲンドモヲ…」
ジャリ…
「そりゃ魅力的なお誘いだが…寝言は寝て言え…三下」
オロチが吐き捨てる様に言い放つ。それは、異形の大男にとって死刑宣告が下されたと同じだった。
「クソォォォォォ！」
異形の大男は飛び上がり逃げようとする…が
「今更逃げた所で遅い…この刀にはこんな事も出来るんだからな…伸びろ！」
そう言って刀を振るうとまるで鞭の様に伸びていき異形の大男に迫っていき体中に蛇の様に絡みつく。
「グオォォォォォ！」
大男がもがけばもがく程絡みつく。
ジャリ…ジャリ…
「ヒッ！」
「だから言っただろ？今更逃げたところで遅いって」
「マ、マッテクレ！」

「戯れ言は聞く気はない…じゃあな」

オロチが鞭の様な刀を持つ手を思いっきり手前に引くと…

斬！

バラバラになった大男

暫く経つと大男だった物は塵となり風に飛ばされていく

「さて…討伐完了…かな？消えろ…」

そう言うと水の刀は蒸発する様に消えていく

「あ、あの嬢ちゃんは大丈夫かな？しゃあない起こしてくるか…」

ジャリ…ジャリ…

これで異形の大男が起こした行方不明事件は幕を閉じる。しかし、オロチの戦いはまだまだ続く。

少女を起こしに行った事を後悔する事は、オロチはまだ知らない。

リョウメンスクナの怪（後編）（後書き）

感想、ご指摘お待ちしてます！

どうしてこうなった…（前書き）

誤字報告をうけて改訂しました

どうしてこうなった…

どうしてこうなった…

目の前には鼻歌を歌い、料理を作っている嬢ちゃんがいる。

「あ！苦手な食材とかないですか？」

「あ、ああ…特には無いな」

「良かった！冷蔵庫の余り物で悪いんですけど、大丈夫ですか？」

「いや…お構いなく…」

すると嬢ちゃんは再び鼻歌を歌いながら料理を再開する。

じゃなくて！何でこんな所で飯なんか作って貰ってんの！

さぁ！回想という名の現実逃避の始まりだ！

ーーーー

「あ、あの嬢ちゃんは大丈夫かな？しゃあない起こしてくるか…」

移動中にあの嬢ちゃんの顔を思い出す。

どっかで見た事あるんだよな～…どこだっけ？　っと、着いたな

「お～い、嬢ちゃん、起きろ～」

「…う…う～ん」

「起きろ～、こんな所で寝てると風邪引くぞ～？」

「う…ん…あ、あれ？ここ…は？」

「ここは…どこの公園かわ知らないが、公園だな。」

少女は俺に気付いた様で

「あなたは…確か…そうだ…あたし…襲われて！」

そう言うと少女は辺り一面を見渡す。あの異形の大男を探しているんだろうか？

「あの！」

「なんだい、嬢ちゃん？」

「あたしの近くにいた、あの大男はどうしたんですか！？それにあなたは、どなたですか！？」

「ああ、アイツね…アイツなら…殺したよ」

「こ、殺した！？ひ、人殺し！？」

「なんだい、せっかく助けたのに人殺し呼ばわりとは…言っとくがアイツは人間なんかじゃない。…それは嬢ちゃんが一番判ってるだろ？」

「うっ、でも殺さなくったって…風紀委員(ジャッジメント)や警備員(アンチスキル)に引き渡せば…」

「なに言ってんの…アイツは人を喰ってたんだ。概ねここら辺で行方不明者が続出してたんだろ？お嬢ちゃん、あんたもその仲間になりたかったのか？」

「あ、あたしは…ただ…」

そう言うと嬢ちゃんは俯いてしまった

まあ、理解できないだろうし、理解して貰おうとも思わないので、早々にここから離れるとしよう。

「ま、嬢ちゃんも早めに帰るんだな。もうこんなに暗いし。じゃあな。」

「ちょっとま…」

なにやら言っているようだが霊体で消えるか、霊体

ボン！

「うわ！」

さてさて…どこに行くかね～、霊体だから腹も減らないし、寝る必要も無いからな～…等々考えてると

「けほっけほっ！酷いじゃないですかいきなり爆発するなんて！」

嬢ちゃんがこちらを見つめて抗議してくる。そう、こちらを見つめての部分が重要だ。何故なら今俺は霊体だから普通の人間には見えないはずだ。なのに嬢ちゃんはこちらを見つめている。偶然か？と思いそのまま立ち去ろうとすると…

「あ！どこ行くんですか！」

と、尋ねてくる。

俺は訳が判らずにいると嬢ちゃんが覗き込んで尋ねてくる。

「あの、どうしたんですか？」

「…嬢ちゃん…俺が見えるのか？」

「？はい？見えますけど？それがどうしたんですか？」

「声も聞こえてるのか…どうなってんだこりゃあ？」

霊体になれば人には見えないんじゃ無かったのか？

1人でウンウン唸って居ると…

「おい！そこの君！」

「え？」

「あ？」

警備員（アンチスキル）と思わしき男と女が近付いて来た。

「こんな遅くにこんな所で何をしてるんだ？」

「そうよ、ここ最近ここらで行方不明者が出ているのは知っているでしょ？早く家に帰りなさい。」

どちらも嬢ちゃんに視線がいっており、俺には一切目もくれない。注意の言葉も嬢ちゃんに言っている。こんな外見の男が嬢ちゃんの傍にいたら普通、俺が不審者に見られる筈…なのだが。

よっし、試してみるか。

俺は嬢ちゃんと警備員（アンチスキル）の男の間に入る。

「え？」

嬢ちゃんが何やら不思議そうに声を上げる

「え？じゃない、さっさと家に帰りなさいと言っているんだ聞いてなかったのか？君は？」

「え？あれ？」

「どうしたの？どこか具合でも悪いの？」

警備員（アンチスキル）の女が心配そうな声で尋ねる

俺はというと、拳を振り上げ警備員（アンチスキル）の男めがけて拳を振り下ろした

「危ない！」

嬢ちゃんが警備員（アンチスキル）の男に向かって言い放つ

ブンッ！

スカッ！

「え！？」

嬢ちゃんが狐に摘まれた様な声を上げる

そりゃそうだ、警備員（アンチスキル）の男の頭を俺の腕が貫通してるんだから、しかも男はピンピンしてるときたもんだ

「？何が危ないんだ？」

「あなた、本当に大丈夫？なんだか顔が真っ青よ？」

「え？あ、はい！大丈夫です！ご心配おかけしました！今帰りますね！アハ、アハハハハ！」

さて嬢ちゃんはこれで帰るだろ。俺もサッサとずらかるかと思っていた矢先

ガシッ！

「んあ？」

あろう事か嬢ちゃんは俺の腕をガッツリ掴んでいるのだ。

「おい！嬢ちゃん！なんの真似だ！」

「アハ、アハハハハ！さようなら～！」

「おい！無視か！？無視なのか！？」

タッタッタッタッタ！

「おい！嬢ちゃん！いい加減に手を離せ！」

「はぁはぁはぁ！ここまでくれば大丈夫…かな？」

「なぁにが大丈夫なもんか！大体なんで嬢ちゃんは俺に触れれるワケ？俺は今霊ｔ「あの！」んあ？」

「あなたは一体なんなんですか！」

「なんだ…ねぇ…嬢ちゃん…異世界って知ってるか？」

「へ？異世界…ですか？それがなんの関係が…「あるんだよ、それがな」え？」

俺はここに至るまでのあらましを話した、自殺した事や俺の経緯は伏せてだが

「そんな…異世界からなんて…それに妖怪や神様なんて…」

「信じられないか？」

「…」

「じゃあ嬢ちゃんが見たあの大男はなんなんだろうな？」

「！それ…は…きっと能力者かなんかで！」

「能力者…ねぇ」

「じゃあ！あなたは…あなたはなんなんですか！」

「俺かい？さっきも話しただろう？俺の名はヤマタノオロチ、一応これでも水神をやってるって」

「水…神？」

「文字通り水を司る神の事だ」

「あなたが…神…様？」

「一応…そうなるな」

「…」

「まあ、理解して貰おうと思ってもいないし、理解する必要もねぇえよ。今日あった事は悪い夢でも見たと思って忘れるんだな」

そう言って俺は踵を返し嬢ちゃんから去ろうとした

しかし…

「待って下さい！」

「んあ？」

「まだ…まだあたしは助けて貰ったお礼をしてません！」

「ああ…そんな事か…気にすんな、偶々居たのが嬢ちゃんで偶々助けた形になっただけだから、そんな事気にする必要はねぇえよ」

「でもそれじゃあ、あたしの気が済みません！」

そう言うと嬢ちゃんは俺に歩み寄り…

ガシッ！

「んあ？」

「助けて貰ったお礼に晩ご飯をご馳走します！」

「いや…だから、気にすｒ「さぁ！行きましょう！家はすぐそこですから！」あれ？なんかデジャヴな感じｇ」

ーーーー

どう見ても拉致られたな、強引すぎんだろ嬢ちゃん…

など黄昏てると

「はーい！ご飯出来ましたよ！」

「嬢ちゃん…俺は飯食わなくても生きていけるんだが…」

「もう！あたしの名前は嬢ちゃんじゃありませんよ！」

「いや…俺は名乗ったが嬢ちゃんは名乗ってないだろう？」

「あ…そ、そうでした！あたしの名前は佐天涙子って言います！お好きなように呼んでください！」

なん…だと

佐天と言えばとある科学の超電磁砲の主要メンバーじゃねぇか！つかそうだよ！なんで顔見た時点で気付かなかった！

等々考えてると

「あの、どうしたんですか？いきなり固まっちゃって？」

「…いや…何でもない…それよりも俺は飯食わなくても生きていけるんだが…」

「でも食べられない訳じゃないんですよね？」

「まあ…そうだな」

「じゃあ、遠慮せずにじゃんじゃん食べちゃって下さい！」

この子話し聞いてなかったの？

ええい！こうなりゃヤケクソだ！

現解

ボン！

「うあ！」

佐天の嬢ちゃんはビックリした様だが俺は気にせずにこう言った

「いただきます」

「！はい！どうぞ！召し上がれ！」

食事中佐天の嬢ちゃんは何が嬉しいのか知らないがニコニコしながら俺を見ている…が気にせず食事に集中する

「ふぅ、食った食った。ご馳走様でした」

「はい！お粗末様でした！」

「所で、ヤマタノオロチ様？」

「んあ？」

「ヤマタノオロチ様h「ストップ」はい？」

「そのヤマタノオロチ様って言うのはなんなん？」

「いえ…だって神様ですし」

「神様とか気にしなくて良いから、もっとフレンドリーに呼んでくんない？様とか付けられると背中がむず痒くってたまんないからな」

「えと、じゃあ…オロチ…さん？」

「おう、なんだい佐天の嬢ちゃん？」

「オロチさんって住むとこあるんですか？」

「いや…無いな…まあ霊体になれば腹も減らないし寝る必要も無いから適当にウロウロして異世界からの妖怪達を探すさ、それがどうしたんだ？」

すると何故か佐天の嬢ちゃんは顔を明るくさせこう言ってきた

「じゃあ！ここを拠点に、住むとこにしてください！」

なん…だと

「ワリィ、もう一回言ってくんない？」

「ですから！ここを拠点に、住むとこにしてください！」

どうやら聞き間違いじゃあなさそうだ

「待て待て！何故そうなる！」

「だって、助けて貰いましたし」

「それは前に言ったろ？偶々助けた形になっただけだから気にする必要は無いって、それに飯も作って貰ってくれただろ？もう十分恩は返して貰ったぞ？」

「偶々助けて貰った形でも、オロチさんは命の恩人です！ご飯だけで恩を返したなんてとんでもない！」

「だがしかｓ「駄目…ですか？」うっ！」

胸の前で手を組み不安そうな顔で覗き込んでくる佐天の嬢ちゃん…俺が悪いみたいじゃないか！ああ！もう！

「わかった！わかったよ！わかりました！」

「！っ！それじゃあ！」

「ああ…もう好きにしてくれ…」

「じゃあ決まりですね！あ！布団とかは心配しなくても良いですからね！」

そんな事の心配しなくても良いだろうに…

はぁ…どうしてこうなった？…いや…俺の押しに弱いせいか

そして俺と佐天の嬢ちゃんの奇妙な同居？生活が始まった

どうしてこうなった…（後書き）

感想、ご指摘お待ちしております！

鬼火の怪（前編）（前書き）

誤字報告を受けて改訂しました

鬼火の怪（前編）

佐天の嬢ちゃん家に居候して1週間経った。

佐天の嬢ちゃんが家に居ない時は霊体になり、あちこちウロウロして妖怪がいないか探したが、ここ1週間、怪異はおきていない。

何かあったとしたら、佐天の嬢ちゃんが襲われたあの公園の笹藪で人骨が見つかったそうだ。

風紀委員（ジャッジメント）と警備員（アンチスキル）が調査したところ、学生証も見つかり、DNA検査の結果、行方不明者達の人骨であることがわかった。

このニュースを聞いて佐天の嬢ちゃんは事のあらましを話しに行こうとしたが、俺が止めておいた。

だってそうだろ？妖怪が犯人です！なんて言ったもんなら、病院行き間違いなしだ。　渋々だが佐天の嬢ちゃんが、なんとか引き下がってくれた時にはホッとしたよ。

その後ニュースでは、連続殺人・遺体遺棄事件として本腰を入れて犯人を探すそうだ。

ま、犯人は一生見つからないと思うがな。なんたって俺がその犯人である異形の大男を殺しちまったんだから…

話は変わるが今日は佐天の嬢ちゃんについて行ってる、勿論霊体でだが。

なぜか佐天の嬢ちゃんに、偶には息抜きも必要です！なんて言われて、またもや無理矢理腕を掴まれ、今は登校中だ。

正直、佐天の嬢ちゃんの好意は俺にとっては戸惑いでしかない。小さい頃から敵意や殺意、害意しか向けられなかったから好意…とゆうのは縁遠かかったし、こんな風に優しくされる事もなかった。

だからだろうか、背中がむず痒くってたまんないし、どう返したら良いかもわからない。よって、戸惑いがちになり返事が無愛想になってしまう。

そんな俺でも佐天の嬢ちゃんは色々気遣いしてくれている。なぜここまで優しく出来るのだろうか？

そんな事を考えてると学校に着いたらしい。

「う～い～は～る！」

ガバッとスカートをめくり上げる佐天の嬢ちゃん

「ほぇ？」

頭に花飾りを付けた少女…初春の嬢ちゃんは携帯端末をいじっていたようで今自分に何がおきたか把握出来ていないのだろう。

「おぉ！今日は淡いピンクの水玉か～！」

「さ！佐天さん！何するんですか！」

「いやぁ、友達としては友人のパンツチェックもスキンシップかなって」

「めくらないでください！」

「本当になにやってんだか…」

ハァ…と溜め息をつくと佐天の嬢ちゃんは俺に気付いたようでガバッと振り返る。

完全に俺の事忘れてたな…佐天の嬢ちゃん

「わ～！み、見ましたか！今の！」

「ああ、見えたな…バッチリと。だが安心しろ嬢ちゃん達みたいな子供に欲情する趣味はないから」

「そうゆう問題じゃ無いですよ！」

「？佐天さん？誰と話してるんですか？」

「え！アハハ！な！何でもない！」

「？変な佐天さん」

キーンコーンカーンコーン！

「あ！遅刻しちゃいますよ！急ぎましょう！佐天さん！」

「本当だ！急ごう！…オロチさんは自由に学校見学してて下さいね」

ボソッと佐天の嬢ちゃんが言ってくる

「ああ、佐天の嬢ちゃんこそ居眠りすんじゃねぇぞ」

そう声を掛けると佐天の嬢ちゃん達は学校に入っていく

しかし…

「学校…ねぇ」

正直、学校に特に思い入れは無い。

あるのは憎悪の感情のみだ。

クラスメートからは無視され続けてきたし、教師もそれに対して見て見ぬ振りを続けてきた。

そんな事があったんだ。憎くもなってくる。

学生時代は喧嘩に明け暮れていたし、楽しい思い出なんて1つもありゃしない。

「まだ…振り切れてねぇんだな」

そんな感情を振り切る様に頭を左右に振る。

「せっかく、佐天の嬢ちゃんが息抜きにって言ったんだ。屋上でも行って寝てくるか」

学校の中に入る。

目指すは屋上だ。

階段を上がって行くと目の前に南京錠で鍵を掛けている扉があっ

た。

おそらく、ここが屋上の扉だろう。

鍵を掛けているのは悪戯に生徒が入って行かないようにだろうか。

「まあ、俺には関係無いがな」

そう言うとオロチは構わず前進する。

スウ

オロチが扉に吸い込まれるように消えていった。

「う～ん！天気も良いし、こりゃ昼寝日和だな！」

そう言うとオロチはゴロンと横になる

「さ～て、寝るかね。幸い放課後まで時間はタップリあるし、目が覚める頃には佐天の嬢ちゃんも授業は終わってんだろ」

そう言うとオロチは目を瞑り本格的に寝る体勢になった

何時間位経っただろうか、オロチは未だに気持ち良さそうに眠っている

キーンコーンカーンコーン！

「んあ？あ～よく寝た！今は何時位だ？」

オロチがふとグランドに目を向けると生徒達が帰ろうとしている

のが見える

「ありゃ、こりゃ寝過ぎたかな？」
佐天の嬢ちゃんは先に帰ったかな？
そんな事を思いグランドを見つめていると校門の前でキョロキョロしている佐天の嬢ちゃんが目に入った。

「お、佐天の嬢ちゃん発見！」

佐天はキョロキョロ誰かを探している素振りを見せるが見つからなかった様で諦めて帰ろうとして初春を見つけるとコッソリ後ろに回り込み…スカートをガバッとめくった。

初春がまた慌てて佐天になにやら抗議している様である

「本当になにやってんだか…」

オロチはそう言って屋上から飛び降りた
地面がドンドン近付いてくるが平然としている
地面に後少しとゆう所で

フワッ

まるで重力がそこだけはたらいていない様に、オロチは宙に浮いた

スタッ

オロチが浮いている状態から地面へと着地する

「さて、佐天の嬢ちゃんの所でも行くかね」

何事も無かった様に歩き出すオロチ

「……から……一緒……ましょうよ！」

「…うせ……レベルに……言わせて……なんじゃないの？」

なにやら初春の嬢ちゃんが佐天の嬢ちゃんを説得しているようだ

「佐天の嬢ちゃん、なに揉めてんだ？」

「うひゃあ！」

「？佐天さん？どうかしたんですか？」

「う、ううん！な、なんでもない！…オロチさん今までどこ行ってたんですか！？」ボソッ

「いやぁ、屋上で昼寝してたらこんな時間になっちまって。」

「もう！探したんですよ！」ボソボソ

「いやぁ、悪い悪い。で？なに揉めてんだ？」

「それがですね…」ボソッ

「？佐天さん？何ボソボソ言っているんですか？」

「え！いや！その！なんでもない！うん！なんでもないよ！」

ありゃ、これじゃまともに話せないな…しゃあない

（あ～、あ～佐天の嬢ちゃん聞こえますか？どうぞ～、今頭に直接話しかけてるから、俺と話したかったら頭で思えば聞こえるから試しにやってみな）

（こうで…聞こえますか？）

（うし、感度良好だな…で？何を揉めてるんだ？）

（実は…）

ーーーー

（ふむふむ、そこのお嬢ちゃんの知り合いの風紀委員（ジャッジメント）に頼んで常盤台の超電磁砲（レールガン）のお嬢ちゃんに会いに行くけど、一緒に行かないかと誘われた訳だ）

（はい…そうなんですよ）

（で、佐天の嬢ちゃんはなんでそんなに行くの渋ってるんだ？）

（だってあたしはレベル０だし、風紀委員（ジャッジメント）でもありませんし…）

（レベルは関係ないだろ？）

（でも相手はレベル５のお嬢様ですよ？どうせレベルにものいわせてるに違いありません）

なるほど、能力在る無いにこだわってるのか。

そういやぁ、原作でもそんな事あったな…佐天の嬢ちゃんは能力

を欲して幻想御手（レベルアッパー）を使用したんだったな…飯の恩もあるしその問題も片付けなきゃいけないな…ま、とりあえずあまり原作を壊したくないが、ここは似て非なる世界だ、ちょっと位介入しても構わんだろ。

それよりも…

（会うだけ会ってみても良いんじゃねぇか？想像通り嫌な奴だったら何かと理由付けて帰ってきても良いんじゃねぇ？）

（う…まあ、その通りですけど）

「？佐天さん？急に黙っちゃってどうしたんですか？」

「え！う、ううん！なんでもない！…わかったよ、一緒に行くよ」

「本当ですか！」

「うん」

「じゃあ早速行きましょう！」

初春の嬢ちゃんはそう言うと佐天の嬢ちゃんの腕を掴み歩き出す

勿論俺の腕も佐天の嬢ちゃんに掴まれてだが

え？俺も行くの？

ーーーー

移動中に初春の嬢ちゃんは常盤台の御坂の嬢ちゃんはきっと、凄いお嬢様ですよ！とか、１度は常盤台に行ってみたい！など力説を振るっている、しかし…本当にお嬢様に憧れてんだな～、まあ、本物はそんなお嬢様なんて縁遠い存在だけどな

佐天の嬢ちゃんはそんな初春の嬢ちゃんの話をのらりくらりとかわしながら相槌をうっている

前方からギャアギャア騒がしい声が聞こえる。
ふと目を向けると変態もとい、白井の嬢ちゃんが御坂の嬢ちゃんに抱きつこうとしているのを、御坂の嬢ちゃんが押さえつけてるみたいだ。

「いい加減にしろ！」

ゴン！

「あうあ！」

あ、殴られた。本当に変態だなぁこりゃ

「あ！白井さ～ん！」

初春の嬢ちゃんが声を掛ける、よくあの光景みて平然としていられるな、初春の嬢ちゃん

「あら、初春ではありませんの、あらそちらの方は…」

「ああ、申し遅れました、初春の友達の佐天涙子で～す。なんだか知らないけど着いてきちゃいました、因みに能力値はレベル０

で～す」

また佐天の嬢ちゃんは…卑屈になりすぎたな

「初春さんに佐天さんね。私は御坂美琴、宜しく！」

「宜しく…」

「お願いします…」

「では、つつがなく紹介も済んだところで、多少の予定は狂ってしまいましたが今日の予定は黒子がバッチリ！」

ゴン！

「アイタ！」

「ったく！ま、こんな所に居ても仕方ないし、とりあえず…ゲーセン行こっか！」

「ゲーセン…ですか？」

「黒子行くよ！」

そう言うと御坂の嬢ちゃんは佐天の嬢ちゃん達に向かって微笑みを向ける。

その後はゲーセンに行ったりコンビニで立読みしたり等して今はブラブラと歩いて居る状態だ

すると佐天の嬢ちゃんは

「なんかさ、全然お嬢様じゃなくない？」

と初春の嬢ちゃんに話しかける。すると初春の嬢ちゃんは

「上から目線でもないですねぇ」

（佐天の嬢ちゃん、あってみて嫌な奴だったか？）

（オロチさん！…いえ、なんとゆうか悪い人には見えないです）

（そうだ、何事も第１印象で決めちゃいけねぇって事だ。１つ賢くなったな）

（はい…そうですね）

「佐天さん？又黙りこんでどうしたんですか？」

「え？ああ、ううん、何でもない！それよりそのチラシどうしたの？」

「ああ、これですか？新しいクレープ屋さんみたいですね、先着１００名様にゲコ太マスコットプレゼントって」

「何、この安っぽいキャラ、今時こんなのに食い付く人なんて」

（佐天の嬢ちゃん前前）

「えっ！あいた、すみま」

まるで御坂の嬢ちゃんは周りの音が聞こえていない様であるそれを怪訝に思った初春の嬢ちゃん、白井の嬢ちゃんは言葉を掛ける

「どうしたんですか？美坂さん？」「どうなさいましたの？お姉様？…あらぁ？クレープ屋さんにご興味が？それとも、もれなく貰えるプレゼントの方ですのぉ？」

「な、何言ってんのよ！わ、私は別にゲコ太なんか、だって蛙よ！両生類よ！どこの世界にこんなの貰って喜ぶ女の子がいｒ」

「「「あ…」」」

視線の先には鞄にぶら下がるゲコ太ストラップがあった

御坂の嬢ちゃんよ、隠すんならもっと上手く隠しなさいな

場所は変わってクレープ屋の行列に並んでいる

「うわぁ、すっごい人～」

「何でこんなにちっちゃい子が…」

確かに凄い人の数だ、遠くでバスガイドらしき女がなにやら周りの親子に向けて大きな声で休憩時間とあまり離れない様に注意しているみたいだ

「タイミングが悪かったみたいですね～」

「先にベンチを確保して参りますわ」

「あ、じゃあ私も…佐天さん！私達の分お願いしますね！」

「お金は後でお支払いますわ～！」

「あ！ちょ！う…」

佐天の嬢ちゃんは言葉を詰まらせた、理由は後ろに並んでいた御坂の嬢ちゃんだろうなぁ。

みるからにゲコ太が欲しくて少し焦っているのがわかる。

（佐天の嬢ちゃん、順番変わってやったらどうだ？）

（そ、そうですね）

「あの、順番変わります？」

そう言うと御坂の嬢ちゃんは一瞬嬉しそうな顔をするが…

「あ！別に順番なんて！私はクレープさえ買えたら」

そう言うが子供達が持っているゲコ太マスコットを目が追っている

（ったく、素直じゃあないね、御坂の嬢ちゃんは）

（ハ、ハハ。そ、そうですね）

そうこうしてる間に佐天の嬢ちゃんの順番がきたみたいだ

「お待たせしました～！はい、どうぞ最後の1個ですよ」

原作通り佐天の嬢ちゃんで最後のゲコ太が付いてきた

「どうも、えっ！最後」

ドサッ！

崩れる御坂の嬢ちゃん

（佐天の嬢ちゃんはゲコ太が欲しいのか？）

（いえ、欲しくありませんよ？とゆうか御坂さんにあげますよ、ものすんごくガッカリしてるみたいなんで）

（ああ、酷い落ち込みかただな、まるでこの世の終わりみたいだ）

（アハ、アハハ）

「あの～、良かったらこれａ」

「えっ！良いの！本当に良いの！」

「えっ、えぇ」

「ありがと～う！」

「い、いえ」

どんだけ嬉しいんだ、御坂の嬢ちゃん

スキップしちゃってるし

恥ずかしいから止めなさい！

「はむ、んぐんぐ」

（佐天の嬢ちゃんクレープ美味いかい？）

（はい、美味しいですよ。あ！オロチさんも食べます？）

（…色々とツッコミたいが遠慮しとくよ、甘いの苦手なんでね）

目の前では変態、じゃなかった、白井の嬢ちゃんと御坂の嬢ちゃんが、じゃれあっている。

しかし…納豆と生クリームのトッピングはないだろう、明らかに不味そうだ。

そう思っていると、初春の嬢ちゃんが不意に佐天の嬢ちゃんにこう言った

「良かったですね」

「えっ？」

「御坂さん、お嬢様とはちょっと違ったけど、思ってたよりずっと親しみやすい人で。」

「ふむ、どうなんだかねぇ」

佐天の嬢ちゃんは視線を御坂の嬢ちゃんに向ける。

視線に気付いたのだろう御坂の嬢ちゃんは、ふと佐天の嬢ちゃんに視線を向けクレープと見比べて、何かに気付いた様な顔でクレープを佐天の嬢ちゃんに差し出した。

「はい！」

「はい？」

「味見でしょ？さっきのお礼、１口どうぞ！」

なにやら勘違いしているようだ、すると

「お姉様！お姉様はわたくしとゆうものがありながら佐天さんと間接的なベーゼを！」

「あんたの友達にはついていけないかも」ボソッ

「ア、アハハ…ん？」

「ん？どうしたの？」

「いえ、あそこの銀行なんですけど…なんで昼間っから防犯シャッターを下ろしてるんでしょうか？」

始まったか、原作通りなら銀行強盗が３人組で出てくるはず、内１人は発火能力（パイロキネシスト）者で更にもう１人は佐天の嬢ちゃんに怪我させるんだったな、佐天の嬢ちゃんからなるべく離れない様にしないとな

メキメキ！

ボカァァン！

辺りは騒然となる

しかし…気のせいか？炎の色が青かったような…

まさか！

「初春！警備員（アンチスキル）に連絡と怪我人の有無の確認！急いでくださいな！」

「は、はい！」

「黒子！」

「いけませんはお姉様！学園都市の治安維持はわたくし達風紀委員（ジャッジメント）のお仕事、今度こそお行儀良くしていてくださいな？」

ボカァァン！

２度目の爆発が起きる

間違いない！炎の色は青だった！それに微かに妖気がする！これは何らかの怪異が関わっている！

これは白井の嬢ちゃんには荷が重すぎる…俺も向かうか！

（あ！オロチさん！どこ行くんですか！）

（悪りぃ！説明は後でな！佐天の嬢ちゃんは安全な所に避難してるんだぞ！）

そう言って現場に駆け出す

3人組の男達が出てきた

「ほら！グズグズすんな！さっさとしねぇと…」

「お待ちなさい！風紀委員（ジャッジメント）ですの！器物破損及び強盗の現行犯で拘束します！」すると男達は顔を見合わせゲラゲラと笑いだした

「なんだよこのガキ！風紀委員（ジャッジメント）も人手不足か？」

「おら、お嬢ちゃん！とっととどっか行かねぇえと！怪我しちゃうぜぇ！」

太り気味の犯人は拳を振り下ろすが空を切る

ガッ！

「そう言う三下の台詞は…」

ドカン！

「死亡フラグですわよ？」

「てめぇ！」

ボッ！

メラメラ！

「今更後悔しても遅ぇぞ！俺を本気にさせたからには、てめぇには消し炭になっｔ」

男が言い終わる前に白井の嬢ちゃんは男とは違う方向に走り出す

「逃がすかよ！」男の手から炎が放たれるが…

「誰が」

ヒュン！

「消えた！」

「逃げますの？」

ヒュン！

ドガッ！

「ぐわ！」

白井の嬢ちゃんは見事なドロップキックを犯人くらわせると倒れた犯人の服に小さな杭を次々とテレポートさせて身動きができない様にした

「空間移動能力者（テレポーター）！？」

「これ以上抵抗を続けるなら、次は体内に直接テレポートさせますわよ」

「ぐっ！」

男は観念したようである。

「ケケケ！ナセケネェナ！」

「っ！誰ですの！」

すると男は急に苦しみだした

「ぐわぁぁぁ！」

「なっ！どうしましたの！」

「熱い！体が！体が熱い！ぎぃぃぃやぁぁ！」

悲鳴を上げていた男はあまりの熱さに気絶したみたいだが代わりに別の声が辺りを包み込む

「ケケケ！イイヒメイダッタゼェ」

「どこにいますの！出ていらっしゃい！」

「メノマエニイルジャナイカ」

「えっ！」

目の前には気絶した男しかいないじゃないか。そう思った次の

瞬間男の体からユラユラと青い炎が出てきた

「サァ、オジョウチャン！オジョウチャンモイイコエデナイテクレヨ！」

「なっ！」

白井の嬢ちゃんは固まってしまった。

そのスキを見て青い炎は攻撃を仕掛ける

ゴォォォ！

青い炎が白井の嬢ちゃんに迫る

「しまっt」

ボカァァン！

「黒子ー！」

「「白井さん！」」

キャー

ワー

辺りを悲鳴が覆い尽くす

「シマッタ、カリョクガツヨスギタカァ？」

ゲラゲラと笑い声が上がるが…

ジュウ！

「ナッ！」

青い炎が仰天する

確かに焼いた手応えはあった、なのに目の前の少女が無傷でいる事に

先程まで居なかった男が少女の前に居る事に

「さぁて、こっからは俺が相手だ。かかってこいよ、雑魚が」

鬼火の怪（前編）（後書き）

感想、ご指摘お待ちしております！

鬼火の怪（後編）（前書き）

これ位の長さなら分けなきゃ良かったｏｒｚ

では、楽しんでくれると幸いです！

鬼火の怪（後編）

「さぁて、こっからは俺が相手だ。かかってこいよ、雑魚が」

「キッ！キサマ！ナニモノダ！ソレイゼンニ、ドウヤッテアラワレタ！」

青い炎は動揺している。しかし…

「それをこれから死に逝くお前に説明してどうなる？それに、名を尋ねる時は自分からって教わらなかったか？」

オロチは明らかに馬鹿にした様に不敵な笑みを浮かべる

「キサマ！イワセテオケバ！イイダロウ！コノ、オニビサマガ、ゼンリョクデケシズミニシテヤル！」

さてと…良い感じに頭に血が上ったみたいだな、後は…後ろでポカンとしてる、白井の嬢ちゃんを退避させるだけだな

「おい、嬢ちゃん。呆けてないでさっさと避難しな」

「っ！貴方は何者ですの！それにアレは一体なんですの！」

「まぁ、詳しい話しは後でジックリ話してやるからさっさと避難しな」

オロチはまるで猫か犬を追い払う様にシッシッと、手で追い払う

それが癪に触った様で

「なっ！今すぐに説明を要求しますの！」

と、突っ掛かってくる

ありゃ、逆効果だったか？

でも…

「今の状況が見えてないのか？嬢ちゃんが今すべき事は市民の安全を最優先すべきなんじゃないのか？」

「それは…」

「ナニハナシテヤガル！」

痺れを切らしたのか鬼火が青い炎を繰り出してくる

「っ！」

再び逃げ遅れた白井の嬢ちゃんの息をのむ音が聞こえてくる。

ゴォォォ！

オロチの目の前まで迫って来る青い炎…しかし

「人の話してる最中に邪魔をするとは、躾が必要か？阻め！」

オロチがそう言って前方に手をかざすと水の壁が目の前に立ちはだかる。

ジュゥゥゥ！

青い炎が水の壁にぶつかると辺りを水蒸気が包む

「なっ！能力者！？」

白井の嬢ちゃんはビックリして居る様だが、かまっている暇は無い。

「ナンダ！？マワリガミエネェ！」

鬼火は狼狽えている

「お前はな」

「ナニッ！」

オロチが鬼火の後ろに現れた

「クッ！」

ボォォォォ！

鬼火はオロチに向かって青い炎を放つ…が

「阻め！」

又オロチの目の前に水の壁が立ちはだかる

ジュゥゥゥ！

更に水蒸気が濃くなる

「クソッ！ナンナンダ！アイツハ！」

鬼火は自分で気付いていない、恐怖している事に

いや、気付いているけど気付きたくないのだろう

自分はいつも恐怖を与える側だった

人間を脅かし、寄生し、生気を奪って生きてきた

人間に畏れられ生きてきた

そんな自分が今得体の知れない男に恐怖し畏れている

そんな事有ってはいけない、その思いが鬼火を何とか奮い立たせている

「もういいか？」

「ッ！」

オロチが再び鬼火の後ろに現れる

「ナンデキサマハ！オレノイバショガワカルンダ！」

「なんで…ねぇ。まぁ、良いか。教えてやろう。お前、蛇って生き物知っているか？」

「ソレガナンダッテユウンダ！」

「まぁ、落ち着けって。蛇はな、目が悪いんだ。んで、目が悪い代わりにある機能が発達した」

「…」

「ある機能とは簡単に言えばサーモグラフィ、つまり周りを、獲物を温度で感知して捕らえているんだよ」

「バカナ！」

「馬鹿も何も事実を言ったまでだが、まぁ、死ぬ前に１つ賢くなったな。おめでとさん」

「クソッ！」

ボォォォォ！

青い炎がオロチに迫る

「動きがワンパターンなんだよ、お前はな」

オロチは水の壁を出す事もなく、紙一重で交わす

「ヒッ！」

オロチは鬼火に肉薄すると水の刀を何もない空間から取り出す

「じゃあな、鬼火」

斬！

「チクショウ！チクショョョョョウ！オボエテヤガレェェェェェ！」

「覚えてたらな、まぁ、俺は記憶力悪いからな、忘れても恨むなよ？」

真っ二つに鬼火の体が裂かれる。鬼火は怨恨の声を出して消えてゆく

徐々に水蒸気が晴れていく、すると

ヒュン！

白井の嬢ちゃんが目の前にテレポートしてきた

「風紀委員（ジャッジメント）ですの！貴方を拘束致しますの！」

「おいおい、いきなり拘束なんて物騒な物言いだな。感謝されても拘束なんてプレゼントは要らないぞ？」

「とぼけないでいただけます？貴方はさっきのあれを明らかに知っている様に見えましたが？」

そう言うと白井の嬢ちゃんは油断なく構えをとる

「だから、後で説明してやるって言っただろ？とりあえずその構えを解いて…」

「問答無用ですの！」

ヒュン！

白井の嬢ちゃんが消える

――――

とった！

白井黒子はそう思った

得意のテレポートで相手の背面をとった瞬間、白井黒子は勝利を確信した

後はあの男に一撃を加え地面に倒れた時に拘束する

それがいつもの手段だった

しかし勝利を確信し油断していたのだろう。

その男が口元に微かな笑みを浮かべている事に気付かなかったのだから

――――

白井の嬢ちゃん、かなりの焦り方だな。

相手の能力を分析もせず突っ込んで来るなんて

風紀委員（ジャッジメント）とはいえ、所詮はまだ子供か

さてと…白井の嬢ちゃんはどこから来るかな？

オロチは目を瞑る

はたから見れば戦闘中に目を瞑るのは自殺行為だが、オロチは違う

スゥと息を吸い込むとオロチの中の景色が変わる

人が立って居た場所は赤くなり、温度の低い所は青くなって見えている

前方だけではなく３６０度全てが見えている

ヒュン！

後ろか

オロチはニヤリと笑う

次の瞬間、白井黒子は驚愕の表情を浮かべて

オロチはやれやれとゆう表情を浮かべて水の刀を白井黒子の首元に突き付けていた

「どうだ？妖怪相手なら死んでるぞ？」

「っ！」

「ちったぁ話し聞く気になったかい？白井の嬢ちゃん？」

「！な…んで、なんで私の名前を知っていますの！」

「なんでって、そりゃあ…」

バリバリ！

「おっと」

突然、横から放たれた電流をオロチはバックステップで避ける

「あんた、誰の後輩に手出してんのよ」

そこには、電気を体に纏った少女…学園都市の第3位の姿があった

鬼火の怪（後編）（後書き）

感想、ご指摘お待ちしております！

超電磁砲（レールガン）ＶＳ蛇の王（ヤマタノオロチ）（前書き）

誤字報告を受けて改訂しました

超電磁砲（レールガン）VS蛇の王（ヤマタノオロチ）

「あんた、誰の後輩に手出してんのよ」

彼女…御坂美琴はそう言ったものの、困惑していた

自分の後輩が銀行強盗を倒した、それ自体はそう珍しい事ではない、寧ろ日常茶飯事だ

問題はその後だ

後輩が倒した男が急に苦しみだしてその後に、男から青い炎がユラユラと出てきた

その青い炎がいきなり後輩に攻撃してきた

後輩はビックリしていて、得意のテレポートで避ける事も出来ない様だった

コインを取り出して超電磁砲（レールガン）を放とうとしたが炎が早すぎて先に後輩の元に辿り着いてしまった

自分は後輩の名を叫ぶ事しかできなかった

絶望感が体にひろがっていった

その時、後輩に辿り着いた炎が鎮火した

結果、後輩は無傷だった

しかし、後輩の前には見知らぬ男、いや…異形の男が立って居た

誰だろうか？そう思っていたら、何やら後輩と揉めている？いや、後輩が一方的に詰め寄っている様だ

すると青い炎が再び2人を攻撃をし始めた

後輩は又避難し損ねた様だ

今度こそ！そう思いコインを構えるが

異形の男が前方に手をかざすと水の壁が出現して青い炎をかき消す

辺りを水蒸気が包みこんだ

又炎が上がり水蒸気が上がる何が起きているのか？

嫌な予感がする

直感的に感じ取った

制止の声も無視して水蒸気の中に突っ込んで行った

徐々に水蒸気が晴れていく

すると何やら後輩の声が聞こえてきた

無事だった！

安堵の息を漏らす

しかし、後輩は誰に話しかけているのだろうか？

それにまだ直感的に危険だと本能が語りかけてくる

足早に後輩の声がする方に歩いて行くと…

透明な刃物を突き付けられている後輩が目に入った

刃物を突き付けているのは先程まで後輩の前に立ち炎を防いだ異形の男だった

それを見て私の中の何かが切れる音がした

――――

「あんた、誰の後輩に手出してんのよ」

御坂の嬢ちゃんが俺を睨み付けている

まぁ、当然だわな

「お姉様！」

白井の嬢ちゃんは御坂の嬢ちゃんに近づいて話し掛ける

「お姉様は下がっていてくださいませ！あれほど注意していましたのに！」

「なっ！殺られそうになってたあんたを助けただけじゃない！」

ギャアギャアと騒ぐ2人を見て溜め息つく俺

すると2人は臨戦体制をとり険しい顔つきで見てくる

「あ～、さっきは仕方なくああゆう事態になったが俺はあんたら嬢ちゃん達の敵じゃ無い。とりあえずその警戒をといてくれると助かるんだが？」

「はっ！どの口がそう言うのよ！あんな事しといてよく言うはね！」

「だから…あれは先にそこの嬢ちゃんが仕掛けて来たからやむを得ずだな…」

「問答無用！」

「後輩が後輩なら先輩も先輩だな、話の聞かない嬢ちゃん達だ」

オロチが再び溜め息をつく

「行くわよ！黒子！」　「はい！お姉様！」

バリバリ！

御坂の嬢ちゃんから電流が迸る

「しゃあない…阻め！純水壁！」

バチバチバチ！

「嘘！防いだ！」

ヒュン！

「がら空きですわよ！」

再び白井の嬢ちゃんが俺の背面をつく…が

「悪いが見えている、後ワンパターンだぞ」

スカッ！

オロチが避け又水の刀を取り出そうとしていると

バリバリ！

「おっと」

「私を無視してんじゃないわよ！」

「お姉様！助かりましたわ！」

「ったく！面倒だね、嬢ちゃん達よぉ！」

「そう簡単に行くと思ってんじゃないわよ！」

「生憎だな、俺は話をしたいだけなんだが？」

「だったら、大人しく捕まりなさいよ！」

バリバリ！

「だから…話を聞けっての！阻め！純水壁！」

バチバチ！

「何回やっても結果は同じだ！いい加減こっちの話を聞けっての！」

バチバチ！

「そうね！さっきはちょっと手を抜いたけど！これからは本気よ！黒子！手を出すんじゃないわよ！」

「しかし！お姉様！」

「あんたまで一緒に焼け焦げるわよ！」

「っ！…はぁ、分かりましたわ、もう好きになさって下さいな。ただし！あんまりやり過ぎないで下さいな！あの殿方には聞きたい事が山ほどあるんですから」

「手加減できたらねぇ！」

そう言うと白井の嬢ちゃんは下がっていく、代わりに御坂の嬢ちゃんは獰猛な笑みを浮かべる

「おいおい、まだやるのか？」

「当たり前でしょ！これで私の電撃を止めたのはあんたが2人目なんだからね！」

「おいおい、最初と主旨が違うだろうが！」

「良いのよ！あんたを倒した後ジックリ話しを聞かせて貰うから！」

「この戦闘狂（バトルマニア）め！」

「うっさい！行くわよ！」

確かにこんなのに目を付けられた上条少年の気持ちが良く分かる気がする。何て言うか

「はぁ、不幸だ」

「どっかの馬鹿と同じ台詞はいてんじゃないわよ！」

バリバリ！

「無駄だ。阻め、純水壁」

バチバチ！

「嬢ちゃんの能力じゃ俺は倒せないぞ」

「その余裕、崩してあげるわ！」

そう言うと更に電撃を強める御坂の嬢ちゃん

バリバリバリバリ！

「だから…無駄だと言っているだ…ん？」

気のせいか？壁が薄くなっている様な……まさか！

「やっと表情を変えたわね！電撃は防げても熱は防ぎきれないわよ！」

水の壁がみるみる蒸発していく、そしてとうとう

バリィ！

「ちぃ！」

水の壁は破られオロチは回避するしかなかった

「どうよ！」

御坂の嬢ちゃんは得意気に言い放つ

「わーすごーい、とでも言えば良いか？流石だな、常盤台中学エース超電磁砲（レールガン）御坂美琴」

「なっ！なんで私の名前を！」

「ほら、動揺してる暇じゃあ無いぞ？行け、水弾」

オロチの周りにバスケットボール位の玉が複数できると美坂めがけて飛んでゆく

「ちょ！」

バシャン！

「お姉様！」

「安心しな、手加減しておいた、気絶位しか出来ない威力だ死んじゃいな…」

バリバリ！

「なにっ！」

「勝手に終わらせんじゃないわよ！」

「手応えはあった、一体どうやって…」　水煙が晴れていく

すると鉄筋コンクリートや外灯、ガードレール等が美坂の嬢ちゃんの前に集まって壁を作っていた

「あの一瞬でこれだけの盾を作るか…流石レベル5だな」

「お褒めにあずかり光栄ね！でもなめんじゃないわよ！」

「見栄を張るのはいいが息が切れてるぞ…俺は女、ましてや子供をいたぶる趣味は無いんでな…さっきのあれで気絶してくれた方が助かったんだが…次は確実に決める」

オロチは鋭い眼孔で御坂を睨み付ける…すると

「え？な、何これ！？」

御坂が困惑した声を上げる

「お姉様？」

「体が！体が…動かない！どうして！なんで動かないのよ！」

「なっ！」

「動き回られると下手に怪我させてしまいそうでな…ちょっと動きを止めさせてもらった、言ったろ？次は確実に決めると」

ジャリジャリとオロチは御坂に近づく

「く、来るな！近寄って来ないで！」

バリバリ！

電撃を放つがオロチに紙一重で交わされてしまう

オロチは着実に美坂に近づいていく

「来るなって言ってんのよ！」

最早悲鳴になっている

御坂はやられる、そう思った時

ドスッ！

「えっ！」
「ぐっ！」
御坂は驚き、オロチは苦悶の表情を浮かべて膝まずいた
「こっ！これ以上お姉様に近づいたら内臓に直接テレポートさせますわよ！」
白井が御坂の前に庇う様に立ちはだかる
「痛いな、酷いじゃないか、いきなり太ももに杭をテレポートするなんて」
最初こそ苦悶の表情を浮かべていたが、今は平然としている事に白井は恐怖をおぼえる
それでなくても初めて人？の体内にテレポートさせた事で、膝に力が入らないのに、何故目の前の男は平然としていられるかわからない
しかし、その後に男は2人が驚愕する行動をとる
「杭が刺さったまんまだと再生も出来ないか…なら」
ブシュ！
メキメキ！
なんとオロチは太ももに刺さった杭を引き抜こうとしているではないか
「「なっ！」」

ブチブチ！
ズボッ！
カランカラン
太ももに刺さった杭を引き抜いたと思ったら
バチバチ！
赤い光とともに傷口が閉じていくではないか
その光景を見て2人は唖然とすると同時に思う…化け物と
「さてと…お嬢ちゃん達」
ビクッ
「俺の体は見ての通り人外でね、嬢ちゃん達の攻撃は大抵効かない、と言うかこの学園都市には居ない。それでもまだやるかい？」
「「……」」
はぁ、こりゃ完全に化け物扱いされてるな
まぁ、話を聞いてくれればそれで良いか
「それで…だ。まぁ、青い炎は端的に言うと「オロチさ～ん！」あん？」
佐天の嬢ちゃんは走って公園から出てくる…スッゴク良い笑顔

で、何だろう嫌な予感がする主に俺に対して

佐天の嬢ちゃんは走って近づいて来るとそのままのスピードで

…俺に跳び膝蹴りを食らわした

ゴスッ！

「ぶふぁ！」

ズザザー！

オロチが綺麗に吹っ飛ぶ

「「……え？」」

ああ、空が綺麗に真っ青だ

そこで俺の意識は途絶えた

超電磁砲（レールガン）ＶＳ蛇の王（ヤマタノオロチ）（後書き）

感想、ご指摘お待ちしております！

問答（前書き）

誤字報告を受けて改訂しました

問答

『あいつに関わるとこっちも不幸になるってよ』

五月蝿い

『あいつ、孤児院出身らしいぜ』

五月蝿い

『おい！お前生意気なんだよ！』

五月蝿い

『ヒィ！化け物！』

五月蝿い！

「っは！はぁはぁ、夢…か？」

オロチが目を覚ます

「ちっ！胸糞悪い夢みたぜ…しかし…久しぶりに見たな…忘れたと思ったんだがな…」

オロチが自嘲するように笑う

ガチャ

「ん？」

オロチが音のする方に目を向けると、自分がベッドに手錠で繋がれているのが目に入る

「手錠？つかなんで俺ベッドに寝てんだ？」

確か…佐天の嬢ちゃんに跳び膝蹴りをくらって気絶したんだよな？

まさか、警備員（アンチスキル）の留置所…とか？

留置所にしちゃあ随分…何て言うか物があるな

オロチがベッドに腰掛ける

窓に鉄格子してないから、留置所じゃない？

オロチがうんうん言って悩んでいると、この部屋に1つしかないドアが開かれる

ガチャ

誰だろうか？そう思っていると頭に花飾りをした少女…初春の嬢ちゃんと佐天の嬢ちゃんが一緒に入ってくる

「「あ！」」

「ん？」

「オロチさん！目を覚ましたんですね！はぁ～、良かった！」

佐天の嬢ちゃんは安堵の溜め息を吐く

「何が良かった…だ。いきなり跳び膝蹴りなんかくらわせやがって！」

「だって！あれはオロチさんが御坂さん達を怯えさせてたから、つい」

「ついで跳び膝蹴りくらわせるなよ！ついで！」

2人がギャアギャア騒いでいると

「2人共落ち着いてくださいよ～」

初春の嬢ちゃんがオロオロしながら仲裁してくる

「あん？！」

「初春は黙ってて！」

「ひぅ！」

どうやら2人の剣幕さに完全にビビってしまった様だ

又ギャアギャア騒いでいると今度は別な3人組が入ってきた様だ

「何を騒いでおりますの？」

「何かあったの？」

「アイツが起きたの！？」

上から白井、固法、御坂の3人である

「ん？」

ふとオロチは入って来た3人を見て疑問に思った

この面子が居るとゆう事は…風紀委員（ジャッジメント）177支部か？

でもなんで…

「なんでって顔してますね」

佐天の嬢ちゃんが言ってくる

「なんで判った？」

「そりゃあ1週間以上一緒に居ますからね、いくら表情の乏しいオロチさんでも判りますよ！」

「「「「…え？」」」」

又、この子は…とんでもない所に爆弾を投下するな…

俺と佐天の嬢ちゃん以外の空気が死んだ

「さ、ささささ！佐天さん！どうゆう事ですか！」

「佐天さん！こんな殿方と一緒に居るとは、どうゆう事ですか！」

「ちょっと！あんた！どうゆう事よ！」

「最近の中学生は進んでるわ～」

1人除いて皆同じ事を言っている

う〜ん、正にカオス

「え？あたし、なんか悪い事言っちゃいました？」

「言ったな。それも相当な爆弾を投下したな」

暫くこの場はカオスのまんまだなぁ

――――

やっと収まったか

じゃあ本題に入りますか

「で？なんで俺はベッドに繋がれて風紀委員（ジャッジメント）177支部に居るんだ？」

「ああ、そうでしたね！それは、あたしが初春や白井さんに頼みこんだんですよ。」

「佐天の嬢ちゃんが？何でまた」

「大変だったんですよ！道路は滅茶苦茶になってるし、警備員（アンチスキル）はあの後来るしで」

「いやいや、道路は俺の責任じゃあ無いからね？そこに居る御坂の嬢ちゃんがガードレールやら鉄筋コンクリートやらを盾に使っ

た責任だからね？」

「五月蝿いわね！後嬢ちゃん言うな！後何で私の名前を知ってたのよ！」

「質問が多い嬢ちゃんだなぁ」

「だ・か・ら！嬢ちゃん言うな！」

「お姉様、落ち着いてくださいな？でも…貴方は選択肢が無いんではなくて？」

「はっ？こんな手錠で俺を拘束した気になってるんなら、大きな間違いだぞ？」

「なんですって？」

白井の嬢ちゃんが眉をしかめる

まあ、見せた方が早いだろ

霊体

ボフッ！

「「「「なっ！」」」」

オロチは首をコキコキ鳴らし白井達の後ろに回った

現解

ボフッ！

「と、まあこんな感じで脱出成功？みたいな」

「「「「……」」」」

佐天の嬢ちゃんは見えてるから例外だが、他４人は絶句している

「オロチさん！何やってるんですか！」

「え？腕がダルいからちょっと逃げてみた？」

「冷静に報告してる場合ですか！皆、唖然としちゃってるじゃないですか！」

「「どうゆう事よ！」ですの！」

「あん？何がだ？」

「「とぼけないで！」下さいですの！」

「能力は１人に１つ！なんで！アンタは複数使えるのよ！」

「そうですわ！どうゆう事ですの！」

白井の嬢ちゃん、御坂の嬢ちゃんが臨戦体制をとる…が

「止めなさい！２人共！」

固法の嬢ちゃんが止めに間に入る

そして、俺の方に向くと

「部下が失礼しました、でも貴方も質問に答えて下さい」

「先輩！なんでですの！」

「白井さん、どんな事情があるにせよ、貴女この人に助けられたのよ？」

「！それはっ！」

そう言って白井の嬢ちゃんは黙ってしまった

「でもっ！コイツは黒子に！」

御坂の嬢ちゃんが食い下がるが

「それは白井さんが先に手を出したからであって、彼自身は先に手を出していないわ」

「！っ…」

御坂の嬢ちゃんも黙ってしまった様だ

「さてと…じゃあ話して貰っても良いですか？」

「見事な説得力だねぇ、ま、最初から話すつもりだったし良いか…まあ、信じる信じないは嬢ちゃん達に任せるよ…じゃあ話すぞ」

――――

俺は佐天の嬢ちゃんに話したように、同じ説明をした

「「「「「……」」」」」

皆一同に固まって居る

「と、まあこんな感じだ」

「そんな…異世界なんて」

初春の嬢ちゃんはどこか呆然としている

「だから言ったろ？信じる信じないは嬢ちゃん達に任せるよって…それに」

「それに？」

固法の嬢ちゃんが聞いてくる

「先日の連続行方不明あれ、現場からは唾液が見付かってるのに犯人が特定できてないんだろ？」

「「「「！！！」」」」

「「？？？」」

風紀委員（ジャッジメント）組は驚き、御坂の嬢ちゃん佐天の嬢ちゃんは？マークを浮かべている

「何故、貴方がそれを…」

固法の嬢ちゃんが聞いてくる

「だから言ったろ？犯人は妖怪だって、学園都市のＤＮＡのデータを取っても犯人なんか出てこないよ、もう俺が始末しちまったんだからな」

「それは…どうゆう事ですの？」

「どうゆう事なにも文字通りだよ。始末＝殺したんだよ」

「なっ！」

「言ったろ？異世界から逃げ出した妖怪を始末するのが俺の仕事だって」

「そ…んな」

沈黙が辺りを包む

「判りました。今日の所はお引き取り下さい」

１番最初に言葉を発したのは、固法の嬢ちゃんだった

「良いのかい？」

「ええ、正直私も混乱していますが…今はちょっと時間が欲しいのが本音です」

「逃げるかもしれないぞ？」

「それは無いでしょう？だって貴方の言う事が本当なら、まだ

妖怪退治をしなくちゃいけない様ですし」

「はっ！本当に大した嬢ちゃんだ！良いだろう！又、用が有ったら佐天の嬢ちゃんに連絡しな！」

「ええ！あたしにですか！？」

「しょうがないじゃないか、俺は携帯持ってないし」

「もう！…判りましたよ！あたしの連絡先は初春が知ってます、何かあったら連絡下さい」

「じゃ、帰るか佐天の嬢ちゃん」

「はい！」

この日は俺達は風紀委員（ジャッジメント）１７７支部を後にした

問答（後書き）

感想、ご指摘お待ちしております！

協力（前書き）

誤字がありましたので訂正しました

協力

あの鬼火の怪異から早くも４日間たった

あれから連絡も無く、相変わらず俺は異世界の妖怪を探している…が

「全然見付からん」

そうなのだ、怪異のかの字も起きていない

妖気も全然感じない

「ど～なってんだ？一体」

溜め息を吐いてお馴染みになってきた、拠点…佐天の嬢ちゃんのアパートに帰る

スゥ

「あ！お帰りなさい！オロチさん！」

佐天の嬢ちゃんは笑顔で出迎えてくれる

未だに挨拶と善意に馴れなくて挨拶がぶっきらぼうになる

「…ああ、ただいま」

「あれから妖怪見付かりました？」

「いや、全然だな。妖怪のよの字も見付からんよ」

「そうですか…まあこんな時もありますよ！あ！そうだ、オロチさん！」

「ん？」

「オロチさんが妖怪探索に行ってる間に初春から連絡があったんですよ、明日風紀委員（ジャッジメント）１７７支部に来て欲しいそうです」

「了解だ」

さて、あの嬢ちゃん達は理解出来たかな…まあ、最悪の場合は罠って可能性も視野に入れとかないとな

「今日は炒飯ですよ！明日の為にたっぷり食べて下さいね！」

「佐天の嬢ちゃん…飯盛りすぎだろ」

――――

さて、約束の日になったが…

（なんで佐天の嬢ちゃんもついて来るのかな？）

（オロチさんが暴走しないようにですよ？）

今は霊体でテレパシーで話している

（暴走って…俺何にもしてないんだが）

（してましたね！明らかに！御坂さん達を怯えさせたり、勝手に手錠から抜け出して御坂さん達の背後にたったり、そもそも白井さんの首に刀を突き付けるなんて…）

（あ！あーっともう着いたみたいだな！）

（むぅ、逃げましたね）

（ハハハ、なんの事やらさっぱりだなぁ）

そんな会話をしながら階段を上って行く

さて、目的地には着いたがドアがロックされている

（佐天の嬢ちゃんドア俺が中から開けようか？）

（駄目ですよ！そんな不法侵入みたいな事したら！今初春の携帯にかけてみますから大人しく待って下さい！）

中学生に怒られた

若干へこむんだが

「あ！初春、今着いたよ。うん、そう今ドアの前。うん、オロチさんもいるよ。判った。は～い」

pi

「今来るそうです」

「そうか」

ガチャ

初春の嬢ちゃんがドアから出てきた

「あれ？佐天さん、あの人はどこにいるんですか？」

「どこって…あたしの隣にいるじゃん？」

「え？隣って言っても誰も居ないじゃないですか？」

「え？ああ！そうか！オロチさん！姿を現して下さい！」

おっと、そうだった霊体のまんまだったな…現解

ボフッ！

「ひゃあ！」

「そんなにビビらなくても良いだろうに…とりあえず久しぶりかな？初春の嬢ちゃん」

「ひゃい！お久しぶりでし！」

「初春、噛みすぎだから」

完全にビビってしまった様だな

そんなに目付き悪いかな俺…へこむわ～

「あの！」

「ん？」

「中にどうぞ！」

メッチャ緊張してます、て顔をしてるな

「なぁ、佐天の嬢ちゃん…」

「はい？」

「俺そんなに目付き悪いかな」

「ん～、良いとは言えませんね！」

グサッ！

「それに、あたしも最初に見た時はどこの不良かと思いましたよ！」

グサッ！グサッ！

「さ、佐天さん、言い過ぎですよ！幾ら目付きが悪くても！」

グサッ！グサッ！グサッ！

「初春の嬢ちゃん…フォローになってないから」

「あ！す、すいません！」

「はぁ、まあいいや、案内してくれ」

「あ！はい！」

そう言って案内をしてくれた先には、固法の嬢ちゃん、白井の嬢ちゃん、御坂の嬢ちゃんが待っていた

「お～お～、また豪華な面子でオッサン嬉しいわ」

「オッサンって…オロチさん幾つですか…」

佐天の嬢ちゃんがジト目で見てくる

「ん？今年で…多分２３？」

「「「なんで疑問系よ！」ですの！」ですか！」

御坂の嬢ちゃん、白井の嬢ちゃん、佐天の嬢ちゃんにツッコミを貰った

「ハイハイ、漫才はそこまでよ」

「おう、で？俺の言った事…理解したか」

まあ、理解されないだろうな、なんせこの学園都市…非科学的（オカルト）なんて後の上条少年側…魔術士と関わりを持つ者しか理解出来ない

だろうな…ま、御坂の嬢ちゃんはその内知る事になる…か

「ええ、理解したわ」

「そうだろう…何？今なんて？」

「理解した…と言いましたの」

白井の嬢ちゃんが言ってくる…

「非科学的（オカルト）は学園都市じゃ信じないんじゃなかったんじゃないか？」

「何？アンタ嘘ついてるの？」

御坂の嬢ちゃんが言ってくる

「いや、俺はてっきり妄言の類いにとられるかと思ってな…後年上をアンタ呼ばわりは良くないと思うぞ？御坂の嬢ちゃん」

「嬢ちゃん言うな！」

「お姉様、落ち着いてくださいな」

「うぐっ！わかったわよ！」

「で？信じた理由はなんだ？」

理由を固法の嬢ちゃんに尋ねると

「理由は3つあるの…まず1つ目はあの青い炎…確か鬼火…だったかしら、あの後、発火能力者(パイロキネシスト)の男から事情を徴収しようとした警備員(アンチスキル)が言ってたんだけど…」

「しようとした？もしかしてその男…生気が抜かれた様な顔をして虚ろな状態じゃなかったか？」

「！どうして判ったの？」

「鬼火は人を脅かし、寄生し生気を吸い取る妖怪だからな…」

「その状態はずっと続くの？」

「いんや？暫く安静にしておけば治るさ」

「そう…良かった」

固法の嬢ちゃん達は安堵の息を漏らす

「で？警備員(アンチスキル)はなんだって？」

「ええ、虚ろになりながらもこう言ってたらしいの…妖怪、契約、と」

「契約？」

なんの事だ？

「貴方も知らないみたいね…」

固法の嬢ちゃんは残念そうな顔をする

「ああ、俺の仕事は始末する事だけだからな」

「そう…それは引き続きこっちで調査してみるわ」

「で？２つ目は？」

「２つ目は…貴方の言っていた行方不明者達に付いていた唾液…これがＤＮＡ検査した結果、人の物でも動物の物でもなかったわ…学者達は新発見したとはしゃいでだけどね」

その様子を思い出したのだろう、嫌悪の表情が見てとれる

「…」

「で…最後は貴方の存在そのものよ」

「ほぉう」

「貴方のＩＤは存在しないし、外から入って来た形跡も無い、オマケに能力を複数使える、貴方何者？」

「俺はヤマタノオロチ…だ。初春の嬢ちゃん、ヤマタノオロチで検索してみな」

「は、はい！」

カタカタカタ！

「…出ました。でも…」

「初春？どうしましたの？」

「古事記からの引用なんですが…」

高天原を追放された須佐之男命（すさのおのみこと）は、出雲国の肥河（島根県斐伊川）の上流の鳥髪（とりかみ）、現奥出雲町鳥上）に降り立った。川上から箸が流れてきたので、川上に人がいると思って川を上ってみると、美しい娘を間にして老夫婦が泣いていた。その夫婦は大山津見神の子の足名椎命と手名椎命であり、娘は櫛名田比売（くしなだひめ）といった。

夫婦には8人の娘がいたが、毎年、高志から八俣遠呂智（やまたのおろち）いう8つの頭と8本の尾を持ち、目はホオズキのように真っ赤で、背中には苔や木が生え、腹は血でただれ、8つの谷、8つの峰にまたがるほど巨大な怪物がやって来て娘を食べてしまった。今年も八俣遠呂智のやって来る時期が近付き、このままでは最後に残った末娘の櫛名田比売も食べられてしまうので泣いているのであった

須佐之男命は、櫛名田比売を妻としてもらいうけることを条件に、八俣遠呂智退治を請け負った。まず、須佐之男命は櫛名田比売を隠すため、彼女を櫛に変えて自分の髪に挿した。そして、足名椎命と手名椎命に、7回絞った強い酒（八塩折之酒）を醸し、垣を作って8つの門を作り、それぞれに醸した酒を満たした酒桶を置くようにいった。準備をして待っていると八俣遠呂智がやって来て、8つの頭をそれぞれの酒桶に突っ込んで酒を飲み出した。八俣遠呂智が酔ってその場で寝てしまうと、須佐之男命は十拳剣を抜いてそれを切り刻んだ

尾を切り刻んだとき剣の刃が欠けた。剣で尾を裂いてみると大刀が出てきた。これは不思議なものだと思い、天照御大神にこの大

刀を献上した。これが天叢雲剣(あめのむらくものつるぎ)のちの草薙剣(くさなぎのつるぎ)である

こっの世界でもその説か…

「どうゆう事ですの！」

白井の嬢ちゃんが詰め寄ってくる…まあ、当然だわな

「まあ、落ち着けって…それはこっちの世界のオロチの話で俺の話じゃない、それに俺は2代目だ、先代のオロチじゃない」

「2代目？」

固法の嬢ちゃんが尋ねてくる

「そ、2代目だ。実際この力を手にする前は只の人間だったわけだ」

「なんでその力を手にしたのよ！」

御坂の嬢ちゃんも詰め寄ってくる

この流れじゃ俺の成り行きも話さなきゃ駄目…か

あんまり話したくないんだがな

しゃあない…話すか

「まず、俺の成り行きから話すか…」

――――

「「「「「……」」」」」

皆一同に沈黙してしまった、嬢ちゃん達にはちとヘヴィだったかな？

「ま、それで今に至るとゆう事だ」

「「「「「……」」」」」

なんか気まずいな…話を方向転換するか

「で？その俺からの情報は上には通したのか？」

「…いいえ、どうせ妄言の類いにとられるから報告はしていないわ…でも」

「でも？」

「この街でこんな被害を黙って見過ごす訳には風紀委員（ジャッジメント）として見ていられないわ」

…何となく読めてきたな

「そこで貴方の力を借りたいの」

「俺としてはあまり賛成はできんな…これは俺の世界の問題で嬢ちゃん達の世界の問題じゃ無い、見て見ぬ振りをすれば今まで通りの生活が送れるんだぞ？」

「さっきも言った通り、この街で好き放題されるのは我慢出来ないわ」

固法の嬢ちゃん達はさっきの沈み切っていた表情が嘘の様に力強い視線になっていた

はぁ、こりゃ断れんな

「判ったよ…「！じゃあ」ただし！条件がある」

「条件？」

「1つ、妖怪或いは怪奇現象の目撃情報が入っても迂闊に1人で行かないで、必ず俺を同行させる事」

「なっ！待っていては手遅れになるかも知れませんのよ！」

白井の嬢ちゃんが食って掛かってくる

はぁ、この嬢ちゃんは

「そんなに死にてぇのか！？ついこの間焼き殺されそうになったのを、忘れたってか！？妖怪舐めてんじゃねぇ！」

「っ！」

周りが息を飲む音が聞こえてくる

「奴等は微かな妖気も感じさせない位に巧みにこの街に隠れて

いる、それをあからさまに姿を現すとゆう事は…」

「現すとゆう事は？」

佐天の嬢ちゃんが恐る恐る聞いてくる

「人を喰う時だ」

「「「「「なっ！」」」」」

「それじゃあ尚更急いだ方が良いじゃない！」

御坂の嬢ちゃんが言ってくる

「逃がした後どうする？奴等は執念深い、目の前の獲物を逃がされてお預けを食らった状態だ。食事を邪魔した奴を怨む、そして…喰う」

「そんなの私の電撃で…」

「学習してないのか？生半可な人間じゃあ太刀打ちできないって。この前、身をもって体験したはずだ」

「それは！」

「それは？なんだ？本気じゃなかったからか？」

「っ！」

悔しそうに唇を噛む白井の嬢ちゃん、御坂の嬢ちゃん

でも…こうでもしないと絶対に先走るから釘を刺しておく

「ふぅ〜、判ったか？」

「…わかったわよ」

「…わかりましたわ」

「良し、なら良い…構わねぇよな？眼鏡の嬢ちゃん？」

「ええ、構わないわ。貴方が怒らなかったら私が釘を刺しておくつもりだったし…後私は眼鏡の嬢ちゃんじゃなくて固法よ」

「そりゃあすまんかったな、で…だ、２つ目は俺をこの支部に常駐させる事だ…その方が早く現場に駆けつけられるだろ？」

「え？オロチさん出ていっちゃうんですか！」

佐天の嬢ちゃんは寂しそうな顔をする

「そりゃあな…極力被害を最小限に押さえるにはこれしかないからな…ま、今生の別れって訳じゃ無いんだ、それに飯の恩も返してないから、困った事が有ったら何時でも来な」

「…わかり…ました…」

「これも構わねぇよな？」

「ええ、構わないわ。寧ろ願ったり叶ったりだわ。でも…その格好はちょっと人目に付くわね…」

「大丈夫だ…昼間は霊体になって見えない様にするから、まぁ、話をしたい時とかはフード付きのロングコートなんかあると何時でも居れるから有ると助かるんだが…」

「それなら心配ないわ、こっちで用意するから」

「了解だっと、こんなもんかな条件は」

「じゃあこれからは宜しくお願い致しますね、え～となんて呼べば？」

「オロチで良いぞ」

「判りました。では改めて宜しくお願い致しますね、オロチさん」

「ああ、こちらも宜しく頼む」

これで本格的な調査ができるな

？？？――――

「４日前、鬼火が消えたそうじゃな」

「ど～でもいいよ、あんな雑魚」

「あなうれしや、存外この世界も楽しめそうじゃ」

「しかしながら一体何者が？」

「なに、そう焦らずとも出てこようて、妾の宿願に立ち塞がる…か、この目で見たいものじゃ」

協力（後書き）

感想、ご指摘お待ちしております！

この頃の日常（前書き）

タイトル通りのグダグダ内容です！ｏｒｚ
次回はちゃんとしたのを書きます！

この頃の日常

風紀委員（ジャッジメント）と協力する約束をしてから3日たった

協力と言っても風紀委員（ジャッジメント）のごく一部

とゆうか固法の嬢ちゃん、白井の嬢ちゃん、初春の嬢ちゃんしかいないがな

俺は風紀委員（ジャッジメント）１７７支部に常駐して居る、勿論霊体で…だが

食事をする必要も無いし、眠たくなる事も無い…その事を言った時は大いに驚かれた

おっと、話がずれたな

まあ、そんなこんなで3日間ここに居る訳だが…

正直、収穫はゼロ

怪しい所や変わった事件があった場所、怪奇現象の掲示板の書き込み等々

ガセネタだったり能力者達が喧嘩や犯罪を犯していただけだったり

怪異のかの字も出てこない

お陰で風紀委員（ジャッジメント）１７７支部は驚異の検挙率らしい

まあ、当然だわな

行く先々で妖怪じゃなくて出てくる犯罪者を逮捕してる訳なんだからな

勿論、情報提供してくれる代わりに俺も多少は手伝っている…そのせいか変な噂も出回っている

『黒のフード付きのロングコートに会ったら体の自由が効かなくなる』とか

『正義の味方か？はたまた犯罪者か？』とか

もはや噂とゆうよりも都市伝説的な感じになっている

まあこの話は置いといて

佐天の嬢ちゃんはこの3日間、必ず初春の嬢ちゃんに着いて来てよく遊びに来ている

その度に

『変な事してないですか？』

なんて言ってくる…そんなに信用無いかねぇ

つか、変な事ってなんだよ

…又、話がずれたな

今日は初春の嬢ちゃん、白井の嬢ちゃんは非番の様でここに居ない

居るのは固法の嬢ちゃんと俺だけだ

カタカタと軽快にキーボードを叩く音が聞こえてくる

今は現解しているのでソファーに横になり、その音を聞きながら微睡んでいると

ふと、キーボードを叩く音が止む

「そう言えば…」

「んあ？」

「ずっと疑問に思っていた事なんだけど…なんで佐天さんは貴方の事が見えてるのかしら？」

固法の嬢ちゃんが尋ねてくる

確かに…今まで普通に過ごしたが

「見えてるだけじゃないんだよな～、実際、普通なら俺が霊体の時は俺の声が聞こえないし、さわる事も出来ないはず…なんだけど、佐天の嬢ちゃんは俺に対してさわる事も出来るし声も聞こえるんだよな～」

「さわる事も出来るの！？」

「ああ、そうなんだよ」

そう言えば…ここは最も近い世界であって、とあるの世界じゃないんだよな…って事は

「なぁ、固法の嬢ちゃん、本当に佐天の嬢ちゃんはレベル０なのか？」

「ちょっと待って、今調べてみるわ」

カタカタカタ

「間違いないわ、彼女のデータは書庫（バンク）によるとレベル０よ」

「そうか…」

パラレルワールドだからてっきりなんかの能力者かとも思ったが…

だが待てよ…上条少年みたいな異能の力…幻想殺し（イマジンブレイカー）の様な力があるとすれば…

「どうしたの？何か心当たりが？」

「いや…なんでもない」

「そう…結局は判らずじまいね」

そう言って再びパソコンに向かう固法の嬢ちゃん

まあ、今は妖怪退治が先決か、それに憶測で物事を考えるのはちょっとな

すると話し声と共にドアの開く音が聞こえてくる

おっと、霊体

ボフッ

「固法先輩、お疲れ様です」

「お邪魔しま〜す」

入って来たのは初春の嬢ちゃん、佐天の嬢ちゃんだった

「あら、いらっしゃい。初春さん、今日は非番じゃなかった？」

こりゃ霊体にならなくてもよかったな

現解

ボフッ

「あ、オロチさんもお疲れ様です」

「ああ、ところでどうしたんだ？今日は非番じゃなかったのか？」

「それがですね…「オロチさんが変な事してないか見に来たん

です！」さ、佐天さん！」

「はぁ～、毎回そう言うけどね、変な事って何？」

「それは、固法先輩と2人になった瞬間に口説くとか？」

「そうなんですか！？固法先輩！」

「初春の嬢ちゃん…本気にしない。なんでそうなるか甚だ疑問に思うんだが…とにかくその線は無いから。俺は同い年の女性か20超えた女性しか興味無いからね？」

「ふ～ん、そうなんですか」

何故か冷房もついてないのに部屋の温度が2、3度下がった様な気がした

なんで佐天の嬢ちゃんから冷気がするんだろうか？

疲れてんのかな…俺

「オロチさんはエロです！エロエロです！」

「だから何でそうなるの！？つか佐天の嬢ちゃん、いきなり何！？何で年齢言っただけなのにエロになるわけ！？」

「どうせオロチさんは出るとこ出てる人が良いんだ！」

「だぁぁぁ！不幸だぁぁぁ！」

大体、最近はこんな感じで1日が過ぎて行く

この頃の日常（後書き）

感想、ご指摘お待ちしております！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9582s/

とある怪異の蛇の王

2011年8月28日20時14分発行